



神聖かまってちゃんと黒澤明『どん底』

ありのままでいられないまま大人になること

「ウソばっか言いやがって！ ありのまま??
これがありのままよ。金もねえ、仕事もねえ
、にっちもさっちもいかねえ。おっつけくたば
る他ねえ。こんなありのままって何なんだ」

↓

黒澤明の映画『どん底』の会話である。



この映画にはクズがたくさん出てくる。クズ
だからこそいえる真の言葉がそこにあった。



一方、クズじゃないからこそ出てくる言葉がある。2014年に日本で公開された映画『プリズナーズ』でそれが描かれていた

。



主人公演じるヒュー・ジャックマンは二人の子どもを持つ男らしく頼もしい父親である。ある日、外で遊びに行った幼い娘がそれっきり戻らず、行方不明となった。なんとしても娘を取り戻したいヒュー・ジャックマンは、疑わしいと思った知的障害のある青年を拉致する。青年に真相を聞きだそうと、拳に布をぐるぐる巻いて、青年をなんどもなんども殴っていく。

あらゆる人々から信頼を得ていた人格者が暴力性をだす瞬間だ。。

ヒュージャックマンは劇中でなんども「おれは善人だ」という。加えて、妻も「夫は善人よ」という。

かれらは自分たちは善人であるという意識をもっているのだ。

つまり、

↓

つまり、善人という意識のせいで自身の暴力に疑問をもたないということである。最低だ。



それを思うとわれわれのようなクズの方がよっぽどマシだと思える。なぜなら、われわれはじぶんは善人ではないという自覚をもっているからだ。かれらにはその自覚がない。だから、他人に暴力をふるうことができるのだ。

わたしたちは自覚がある。じぶんが善人でもなければ強き者でもないことを知っている。ソクラテスふうにいえば、じぶんがけっして善人でないことを自覚してるぶんだけ、善人ヅラしているやつよりも人格者ということだ。

しかし、そういう自覚のある者こそ頭をかかえて悩む。

↓

ある本で載っていたが、うつ病になりやすいにんげんは、心の弱いにんげんではなく、責任感があるにんげんだという。

わたしたちのようなクズボンクラは常に3センチ前にうつ病の影がある。というか、おそらくうつ病の診断テストをすればうつ病と診断されるであろう。そういう自覚がある。とはいえ、それをいえば、多くの日本人がそうだろう。

そもそもポジティブで生きてるにんげんはきもちわるい。

↓

そもそもポジティブで生きてるにんげんはきもちわるい。ネガティブをかかえたポジティブなら大歓迎なのだが。ロックフェスの浮かれ具合やツイッターの意識高い系ツイートや日常そこそこ楽しいツイートをみるに、ネットが発達してもわたしたちが生きにくい社会には変わりがない。



わたしたちはアッパーなにんげんがきらいだ。そんなだから黒澤明の『どん底』で描かれているちっとも立派でないにんげんに心ひかれるのだろう。

映画の劇中で三船敏郎演じるスリ師はこう語る。



「おれだってこんな暮らしがよくねえことくらい、知ってるよ。ただ、その…なんだ世間じゃ おれよかよっぼど大ドロボーのくせに、でけえツラして暮らしているやつが大勢いやがる！ だから、なんて考えてたら、そんなん気休めさ。どうも面白くねえ…。さっぱりしねえんだ。おれは後悔なんてしてねえ。そうでもしてないとかたばってらあ！

でもよお、おれはこんな気がして仕方がねえんだ……、このままじゃいけねえ。もっとマシな暮らしをしなくちゃならねえってよ」

↓

惨めな気持ちをだいてることがわかるセリフだ。

ロックに心惹かれるにんげんもこのようなにんげんである。



自己否定と自己肯定のくりかえし。わたしたちはたしかにクズである。自分をおとしめておとしめてしまい惨めになりすぎてしまう。消えてなくなりたいくなる。しかし、それだけでは、つらぽよすぎて生きていけない。

そのために、自分をすこしでも肯定しようとする。そうやってギリギリで生きているのだ。



『どん底』でもこのようなセリフで語られる。

↓

「わたしが、たとえば、明日になったらだれかいい人がくる。そうじゃなかったら何かが起こる、何かいいことがあって…。そんなこと考えちゃ待ってんのさ」

「おれなんか何にも待ちゃいねえや。みんなもういいとこなんか済んじゃったたい」

「でもねえ、近頃はわたしがポツクリ死んじゃう。そんなことよく考えんのよ。すると、なんだか心細くて」

「おめえもラクじゃねえーなあ。何しろ、実の姉があれじゃあな」

「じゃ、だれがラクなの、みんな辛い人ばかりよ」

「なんだと！？ ウソつけ！！ ラクしてるやつはゴロゴロいりゃあ、ちくしょう！」

↓

わたしたちは教室の絶望のなかにいる。学校燃えないかなあ、とか。隕石落さないかなあ、とか。絶望の日常に不満をもっている。

そのなかでなぜ死なないか。『どん底』で語られているように、ぜったいに何かが起こる！ 起こるはずだ！……はずだ…。そうじゃないと…惨めすぎるだろ…。という一筋の思いである。わたしたちはなんとかギリギリで生きているのだ。

ロックンロールというのは、↓

ロックンロールというのは、ギリギリの一本の生きる線を与える。たとえばこれが「ロックを聴いて人生が180度変わりました！ ともだちもたくさんできました！ 彼氏彼女もできました！」だと、ウソっぱちに思える。ロックはそんな万能薬ではない。劇薬である。それに浸かるといろんなものを無くす。

↓

たとえば、ロックを好きになって友達が増えるわけがない。より孤立し、孤独になるはずだ。なぜならば、それまでの友達とのやりとりの面白くなさに気づくからだ。それはロックを心に受けた者たちが通る道である。

さて、神聖かまってちゃんを好きになったとして友達が増えるだろうか。増えないだろう。ぎゃくに減るはずだ。じぶんだけが孤独じゃなかったと思えるその後で、深く孤独になるからだ。もし、友達が増えたという者がいたならそいつはもうロックを聴かなくていい。さっさとこのページを飛ばしてカタログバンドのインタビューでも読んでくれ。



↓

神聖かまってちゃんは孤独の者に届く歌を歌う。孤独の歌を歌う者はいまたくさんいるが、届くか届かないかでいえば、届くものは少ない。それは個人の資質というよりも、リスナーをちゃんと意識しているかしていないからだ。

の子はリスナーを意識している。それも10代を意識している。だからダイナミズムがあって刺激的なのだ。



いま、多くの若手バンドが意識しているのはロックリスナーやロックシーンの動きである。ほかのロックバンドからどう思われるか、ロック好きのリスナーからどう位置づけられてどう思われたいか、そんなことばかり考えているように思う。

それは、ロックフェスを意識したアッパーな楽曲の乱発。踊るということをキーワードにした楽曲にみてとれる。

↓

じぶんが10代のとき、ロックをとくに好きになっていないとき、アッパーな曲で踊りたい曲を求めていたか？ 求めていないはずだ。人にはいえない自分の気持ちを代弁してくれていたり、孤独な心をすくいとってくれる楽曲を求めていたはず。踊れるだとか踊れないだとかそれはほんとうはどうでもいいはずだ。

わたしたちは心でロックを聴く。それはフツーのようにみえて案外できる人はすくない。

神聖かまってちゃんはその扉を開いてくれる数少ないバンドだ。



↓

うおお←

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ